

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県の未就園児を持つ保護者の子育て支援ニーズ：
公立幼稚園における子育て支援;未就園児親子登園

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): 子育て支援, 幼稚園, 母親の子育て支援ニーズ, 未就園児の親子登園 キーワード (En): 作成者: 嘉数, 朝子, 上地, 亜矢子, 新城, 直美, 永山, 加奈子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5092

沖縄県の未就園児を持つ保護者の子育て支援ニーズ

— 公立幼稚園における子育て支援；未就園児親子登園 —

嘉数 朝子 上地亜矢子 新城 直美 永山加奈子

The Need for Parent Support in Parent Center in a Kindergarten of Okinawa

KAKAZU Tomoko UETI Ayako SINJYO Naomi NAGAYAMA Kanako

<要約>

那覇市立Y幼稚園で行われた子育て支援事業、未就園児の親子登園を対象として、アンケートや参与観察および参加者へのインタビューなどを行い、保護者のニーズを明らかにし、沖縄県の公立幼稚園における子育て支援のあり方を考察した。子育てをする際に必要な支援についてのアンケート調査からは、母親のニーズは子どものための場、親のための場、相談・情報、金銭の4つに分類された。未就園児親子登園についての8ヶ月におよぶ参与観察とインタビューの結果から、Y園の「ゆるやかな集団で制約が少なく自由」な特性が明らかになった。幼稚園における子育て支援の4課題；①教諭の専門性、②物理的環境整備、③行政との協力体制、④子育て支援の効果（+-の両面）が検討された。

Key words: 子育て支援 幼稚園 母親の子育て支援ニーズ 未就園児の親子登園

<問題と目的>

現在我が国では出生率の減少に歯止めがかからず、急激な少子化現象が懸念されている。そのための施策も数々行われてきたが就労支援が多かった。近年家庭で養育する母親への支援の必要性も遅ればせながら指摘されるようになってきた。はじめに我が国の子育て支援の動向を中野（1999）にしたがって概略を紹介する。1980年代の子育て問題のキーワードは「親離れ、子離れ」であった。社会から孤立した家庭や母子のカプセルから抜けだし、母子が仲間と出会うための場所づくりをすることが支援の中心で、子どもの自立と母親の成長を促すために公民館保育や地域の自主保育のネットワーク化がすすめられた。1990年代のキーワードは「少子化」、「子育て支援」で現在まで続いて

いる。親自身が子育て経験が乏しく孤立しているために、情報化や商業化の影響を受けやすい。子育て情報への依存、子育ての外注化が急増し、幼児の生活がゆとりのないものになり、幼児の早熟化、早期教育化が心配され始めた。少子化とともに母親も子育て以外の自己実現を求めるようになったため、子どもを預けるシステムの充実を中心に子育てへの社会的な支援が始まった。90年代以降、子育てはもはや母親だけで担えるものではなく、男女の共同作業であり、次世代育成のための社会的な支援の対象となってきた。

1994年に厚生省等4省が10年計画の子育て支援策「エンゼルプラン」を策定した。施策の第1は、「子育てと仕事の両立支援」で、保育時間の延長による親の就労支援である。保育所では保育時間延長と低年齢児保育の拡大、幼稚園では閉園後の預かり保育、学童クラブの充実等である。施策の第2は、「家庭における子育て支援」で、保育所

*Faculty of Education, Univ. of the Ryukyus

を中心とした育児の孤立感や不安感の解消のための相談機関や地域の子育て支援ネットワークづくり、母子保健医療体制の整備である。先進的試みには、武蔵野市立子育て広場「0123 吉祥寺」がある。柏木・森下（1997）は次のように指針をまとめている。母親にとっては息抜きやストレス発散の場、子どもにとっては思い切り遊べる場を、そして安全性、利便性、自由であることを設置の目的とした。当番などの役割があったり、年度始めに登録し、参加が義務づけられるような従来型の講習会などは、乳幼児を持つ母親、特に転居などして支援のニーズの高い母親にとっては利用しづかったことを改善するために、このような方針がたてられ、母親たちからは歓迎され、全国に広がっていった。その点で自由に気軽に利用できることを考慮して設置された施設であった。その後、全国でこの種の施設が展開されるようになった。

平成11年に改訂され翌年から実施された幼稚園教育要領では、幼稚園経営の弾力化として「都市化、核家族化、少子化、情報化などの社会状況の変化が進む中で…幼児の生活を全体として豊かなものにしていくために、幼稚園が家庭や地域社会との連携を深め、地域の実態や保護者の要請などを踏まえ、地域の幼児教育のセンターとしてその施設や機能を開放し、積極的に子育てを支援していく」ことが求められている。都市部においては、就労支援だけでなく、生涯学習（趣味や学習）の支援のニーズも高まっており、調査がすすんでいる（ポピンズコーポレーション、2001）。

このように少子化と子育て支援のあり方は地域特性によって異なる。沖縄県は全国1の出生率を保っているが、県内での推移をみると少子化傾向は顕著である。同胞数が多く、核家族化は進んでいるものの親族が近居しているものが多いと予想される。したがって育児不安は低いと予想され、都市部のような閉塞的状况は少ないのではないかと考えていた。実際には母親たちの子育て状況はどうなっているのだろうか。

実際には沖縄県でも都市部においては核家族化が進行している。また、公立幼稚園の普及が全国1であること、また、その殆どが1年保育であることなど、沖縄県の幼稚園教育の特異性がある。

すなわち、0、1、2、3歳児に加え、4歳児も未就園児となり支援の対象となる。

そこで本研究では、沖縄県の公立幼稚園における子育て支援施設を対象にして子育て支援のあり方について検討する。具体的には、沖縄県那覇市立Y幼稚園における未就園児の子育て支援事業について、参加者（親子、教諭）にとっての意義や役割について検討し、子育て支援のありかたや方法について検討する。

沖縄県に於ける子育て支援の概略：沖縄県に置いては十分ではないが就労支援は早くから行われていたが、家庭における子育てを支援する試みははじまったばかりである。県下の各幼稚園においても子育て支援が開始された。平成13年度には那覇市は文部科学省「幼稚園における子育て支援活動の推進に関する調和委託事業」の地域指定を受け、「保護者をどう支援していくか」について報告書をまとめている。それによれば、研究協力園のY園においては平成13年度の利用者はのべ千人をこえ、家庭における子育ての支援のニーズが高いことを示している。

本研究では、沖縄県の家庭における子育て支援、具体的には那覇市の那覇市立Y幼稚園でおこなわれた子育て支援事業の実施状況を検討することを目的とする。Y園では未就園児親子登園のために園庭開放を行っている。研究Iでは分析の視点を得るためにY幼稚園就園児の母親を対象に必要としている子育て支援ニーズをアンケート調査した。研究IIでは未就園児親子登園への参加者（未就園児や母親および教諭）を対象として、インタビュー、参与観察を行い、参加者の様子やニーズの変化などを検討する。

研究I：幼稚園児の保護者を対象とした子育て支援ニーズ調査

目的：幼児を持つ保護者が必要とするニーズを把握することを目的とした。

方法：

対象：Y幼稚園の保護者80名に調査用紙を配布し、回収されたのは53名であった（母親52名、父親1名）。基本的属性：平均年齢34.9歳（範囲23～46歳）。子どもの数の平均2.5名（範囲1～4名）。本人の兄弟数の平均4.2名（1～8名）。平均結婚

年数9.0年(0~17年)。就業形態：常勤12名(22.6%)、パート20名(37.8%)、専業主婦21名(39.6%)。

質問項目：「育児をするときにどのような公的・私的支援があったらいいと思いますか。ご自由にお書き下さい」と教示し、自由記述してもらった。

実施時期：平成14年度11月

結果：

支援ニーズについての自由記述の分類：筆頭著者と第2著者の2名の合議で自由記述を分類した結果、母親のための場、子どものための場、情報(相談を含む)提供の場、経済的支援という4カテゴリーが確認された(表1参照)。

表1 支援ニーズの分類

① 子 の た め の 場	子のための場	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい子が安心して遊べる場所があるといいです。広い室内のスペースがあると思います。 ・公園に警備員か警察がいてくれたらいいと思う。(安心してトイレに行けない) ・子どもが安心して遊べる児童館などを増やしてほしい。 ・児童館を増やしてほしい。
	一時預かり	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもを連れては行けない所(病院、法事など)へ出かける時に一時預かりをしてくれる施設があればいいと思います。 ・いつでも子どもを預ける事のできる所(きちんとした保母がいる、保育設備が整っているなど)。今の公的保育所の一時預かりは、いろいろ決まりがあり、土日は預かってもらえない、料金も時間ではなく1日単位である、両親も兄弟もなく(母親の?)具合が悪くても預かってくれるところもない。お産の時もみてくれる人がいないし、主人も仕事を休めないなどいろいろ事情がある。安心して預けることのできる所がほしい。 ・一時的な時間のゆとりもほしいと思う。 ・一時預かりの園などを増やしてほしい。それよりも認可外保育園の切り捨てのようなことはやめてほしい。待機児童をこころよく引き受けてくれるのに…。少子化の時代、子どもは宝なのに親が安心して働けない。 ・子どもが2人いるので、子どもが1人病気になり入院しないといけない時などに子どもを1人預ける施設が近くにあればよい。
	延長保育	<ul style="list-style-type: none"> ・延長保育：体調が悪い時に預かってもらう簡単なシステム作り ・共働きのため、公的な学童クラブが必要だと感じる(特に幼稚園や低学年)。現在の学童は父母が運営しているため、時間的な面(勤務時間内での活動がある)での負担が大きすぎる。私立幼稚園は一日保育が可能だが、公立の幼稚園ではできないのが疑問。(4・5歳児の発達段階等の理由との話はあったが、私立幼稚園では関係ないのでしょか?)
	2年保育	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事をしたくても子どもが小さいとやとってもらえない。そうすると認可保育園に入れて十分な保育を受けさせることができず、家で母親とだけ向き合うため、子ども同士で遊ぶことが苦手な臆病な子になってしまった。わたしの子どものことを考えると、待機児童の改善ということもふまえて幼稚園が2年、できれば3年保育になってくれるといいと思う。
② 親 の た め の 場	親のための場	<ul style="list-style-type: none"> ・母親同士の話し合える場所&ストレス発散できること ・用事やリフレッシュの時など、気軽に、安価で安心して預けられる場所 ・育児をする上でたくさんの方が少なからず悩みを持っていると思う。 ・育児に関する情報はさかんにあるが親と子がコミュニケーションをとりながら、親同士が子育ての話をしたり、読み聞かせなどetcできる場があると、それだけでも親はリラックスできたり、悩みも解消したりといいのではないかな~と思う。 ・ちょっとした癒しスペースがあるといいと思う。

③ 相談・情報	相談	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てをする上での悩み事などを気軽に相談できたり質問できる場所があればなあと思います。 ・子どもを叱る時のタイミングやどういう言葉を使ってたしなめるのか、いろいろ考えて話しているのですがなかなか言う事を聞いてくれません。良い叱り方、誉め方の話し方があればいいと思います。
	情報	<ul style="list-style-type: none"> ・ペンギン組も幼稚園に入ってから知ったので、もっとわかるようにしたほうがいいと思う。
④ 金銭	金銭	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校入学前まで医療費無料化 ・児童手当の延長、公民館など ・ここ3・4年の間に乳幼児医療費の助成金支給制度が0歳児から3歳児までにのびたのですがかなりおそいと思う。少子化で将来はどうなるのかと言っているわりには、子どもがいる家庭（2名以上）への援助がもっとないといけないのでは…。うちもそうですが子どもを成長（小学校、中学校、高校へと）させるのはすごく大変なことです。 ・子育てをするのに保育所、学校、塾などお金がかかりすぎて子どもがたくさんはしくても金銭的な面で断念しざるをえない。
⑤ その他	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・最近の沖縄市での少年暴行事件にとってもショックを受けました。思いやりのない、やさしさのない、いたわりの心もない。どうしてこのような子どもに育つか、その根本にあるのは何か。今私達大人はもっとつきつめて考えなければならぬと思う。それには幼い時からの叙情教育がとても必要だと思う。今は幼稚園からいじめがあると聞いています。親や先生はこういったメンタルな部分にも目を向けて取り組んでほしいと思います。 ・母子家庭の方々は、市なり国から（金銭的？）支援があるが、女1人で子どもを育てていくことは大変なことです。精神的なサポートがとても重要なのもっと考えてほしい。 ・私は今、共働き（常勤）でがんばっていますが、主人にも実母にも友人にも先輩にもすごく恵まれた環境で働かせてもらっていますが、やはり気になるのは週休2日制になったのはどうかと思います。実際自分は土は仕事なので主人と子ども達は一緒に過ごしています。それはそれでいいんですが、やはり土曜日仕事の家庭では大変です。

研究Ⅱ：未就園児親子登園についての質的研究

目的：Y園における未就園児登園の様子を参与観察・インタビューを通して質的に分析し、幼稚園における子育て支援のあり方を検討する。

方法：

対象：未就園児親子登園に参加する保護者と子ども、サポートする教諭。

観察期間：平成14年5月～12月

5月から12月中旬（月曜日から金曜日の間）まで実施された未就園児への子育て支援事業の活動を週1回観察した。親子の観察記録と親や教諭への面接の結果を分析した。

対象の特性：

- ① Y園における未就園児の子育て支援事業の概略
那覇市の人口は平成12年12月現在で303（千人）で、沖縄県の県庁所在地である。公立幼稚園は35

園で5歳児保育のみを行っている（14年度から試験的に3園で2年保育が開始された）。Y園は在籍数は5歳児80人で、教職員数は7人である。

Y園は、国の委託に基づく子育て支援事業の一環として、平成12、13年にモデル園に指定された。14年度は未就園児の子育て支援事業への予算措置はない。図1に示した施設配置図の中の、『絵本の部屋』を未就園児の親子の部屋とした。園庭と未就園児のための部屋が近接しているため恵まれた環境である。平成13年度の未就園児の参加のべ人数1384名であった（表2参照）。年齢別の内訳を図2に示した。平成14年の段階では沖縄県の公立幼稚園においては1年保育が殆どであるために、Y園においても4・5歳児の参加が多いのが特徴である。現在、那覇市教育委員会では4、5歳の2年保育を段階的に推進中である。

表2 平成13年度未就園児登園のべ人数

月	6	7	9	10	11	12	1	2	3	合計
登園数	217	79	115	168	191	171	127	183	133	1384

表3 平成14年度未就園児登園のべ人数

月	5	6	7	9	10	11	12	合計
登園数	90	127	84	90	73	129	70	663

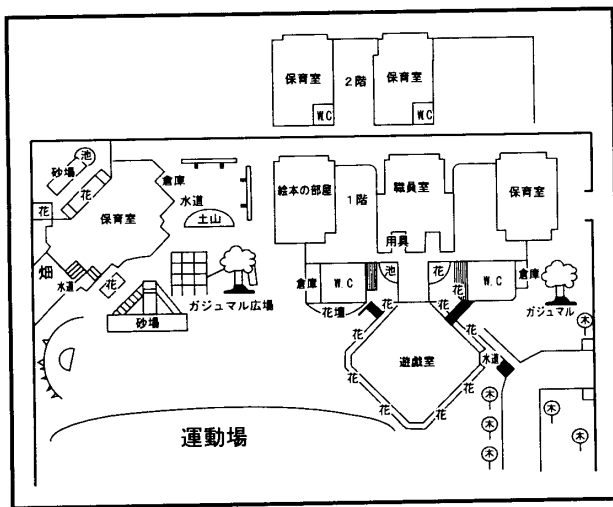


図1. Y園の施設配置図

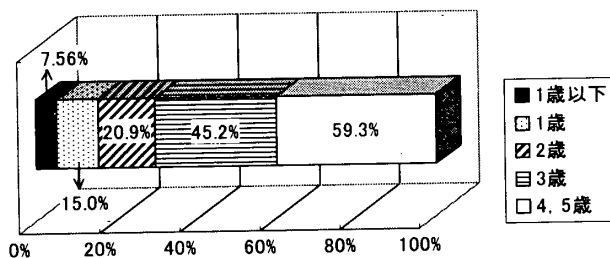


図2. 平成13年度参加者内訳

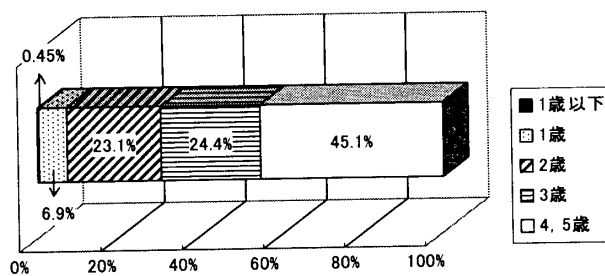


図3. 平成14年度参加者内訳

② 地域の実態

Y小学校に併置されたY幼稚園は那覇市の中心に位置し、住宅密集地域で商店街や新興住宅地もある。周囲には公共施設が多く、利用できる施設としては、Y公園、中央児童公園、中央公民館、県立図書館、市立図書館などが徒歩でいける範囲にある。Y幼稚園ではこれらの施設を園外保育でよく利用している。

③ 平成14年度の活動内容

5月15日に未就園児の『遊びの会』が開始され、開所式が行われた。それから12月18日（2学期終了式）の間の参加のべ人数は667名であった（表3参照）。年齢別の内訳を図3に示した。今年度においても4・5歳児が多いことが特徴である。

④ 参加した保護者の特徴

保護者の9割以上が母親で、祖母やおば（自分の子どもきょうだいの子どもを一緒に連れて参加）もいた。父親はボランティアで修繕などに参加することはあったが、未就園児クラスへの登録はなかった。

結果：

結果は、次の3項目、参加動機（母親へのインタビュー）、つぎに参与観察（子どもの様子、母親の様子）、教諭へのインタビュー、について記述する。

1 参加動機

参加した動機について母親にインタビューした結果を、研究Iで見いだされた4カテゴリーで分類整理したものを紹介する。

① 子どものための場

・同年齢の子どもが近所にいない、公園で遊んで

いる子が少ない。公園にいても自分たちだけなので、トイレにくのも大変、着替えや飲み物などを入れた大きな鞆もずっともってなくちゃいけない。緊張するので1時間が長い。

- ・公園が危険である（浮浪者がいたり、ガラスの破片が落ちているなど管理上の問題点）。自分の子どもの名前を呼ぶのもためらう。いつも行っている公園だと子どもの名前が分かると誘拐されるのではないかと不安。心配しすぎかもしれないけど。公園には浮浪者が寝泊まりしているので。水道で顔を洗っている人もいるから泊まっている。
- ・子どもはとても楽しんでいる。園庭での外遊び、特に砂場はよく管理されているので安心。子どもも満足し、帰宅後疲れてよく寝てくれる。楽しいので帰るとき嫌がって泣くほどである。
- ・1年保育では集団生活に慣れないままに小学校へあがることになり不安である。3、4歳ともなると家では退屈してしまう。友だちも欲しいし、もっと広い所で思い切り遊びたいようだ（4歳男児の母）。
- ・自宅では経験させることが難しい、多様な経験をさせたい（プールや制作、観劇など）。保育園児にくらべて、家庭で育てていると体験が不足しているので、できるだけいろいろ体験させたいが、お金もかかるし機会も少ないので、こちらでの行事は前もって知らせてもらったら事前のチェックして逃さず体験させたい（幼稚園児の母、2歳男児の母の他多数）。実費を払っても良いから体験させたい。
- ・子どもが小さく午前中に寝てしまうことがあるので午後もやってもらえらるともっと良い（1歳男児の母）。

② 母親のための場

- ・親も楽しみたい。ゆんたく（おしゃべり）したい。去年はこの仲間でコテージで泊まった。母親と子どもたちだけで。忘年会もした。仲間ができて楽しい。
- ・その点ここでは、ちょっと見てもらえるし、随分楽である。休むところもあるし。昼の部屋もあるし。おしゃべりも楽しいし。色々な情報も得られるし。困り事の相談もできるし解決できる。「トイレトレーニングどうしてる？」

などと聞ける。リサイクル情報や安い店、お下がりなど生活情報も得られるので助かる。

③ 相談・情報（専門家からの育児相談など）

- ・「講演などはあまり必要でない。友だちにきくことで解消できる。重大な相談は顔が見えないほうが良いので、電話相談などがいい」。

原田（2003）は、精神科領域ではセルフヘルプ・グループでのピア・カウンセリング（自助グループ）の役割が大きいことが認識されているという。子育てにおける悩みは、「子育てサークル」はセルフヘルプ・グループのようなものだと原田は述べている。同じ子育て真っ最中の親同士や先輩ママとの会話が、ピア・カウンセリングになる。同じ立場の者同士の会話が再も癒されるという。子育てサークルが子育て支援の基本形態である。グループ子育ての場に参加できる親の層は、できるだけそこで支援するのが、母親の希望にもそっていることがここで確かめられた。

- ④ 経済的支援について、Y園に期待する声はなかった。予算がつかないことを保護者がよく知っていることもあるだろう。

2 参与観察の結果

① 1日の流れ

未就園児親子登園の典型的な1日の流れ（6月以降）を下記に示す。

- ・10時頃から母子で登園（9時台は少ない）—自由遊び 時間は自由なので12時頃に登園する母子もある。
- ・11時幼稚園児が絵本の部屋で絵本を選び借りる。未就園児も借りることが出来る。貸出業務はボランティアの母親が行う。
- ・11:30-11:50各教室で読み聞かせ（上に幼稚園児を持つ母がすることが多い）
- ・11時40分頃から弁当の準備
- ・12時半頃には終了し、片づけ各自自由に遊ぶ
- ・13時半降園

おやつ時間は母親たちが一同に介する場面となり情報交換などがおこなわれる。それ以外は、数組の親子が一緒に遊ばせる場面もあれば別々に遊ぶ親子もいる。園庭が広いので選択の自由があることは母親たちにとってよい条件であろう。

② 子どもの様子

夏休み前（4～7月）は、2、3歳児では母親から離れない子が多い。4歳児は2、3人の集団で同年齢同性で遊ぶ。在園児との交流は殆どみられない。

夏休み後、2歳児でも母親から少し離れて遊ぶ。在園児2名が2歳児1名をシャボン玉遊びに入れている。

③ 母親の成長

- ・ 他の母親との交流：自分の子と同年齢の他の子を遊ばせる。3人で遊ぶの自分の子（4歳男児）の砂遊びを見守りながら2歳女児を抱いてあやし寝かせる。忘れ物を取りに帰宅した母親のかわりに子守をするなど相互に協力する様子が数多く見られた。
- ・ リーダーとしての成長：今年始めて世話役を引き受けた（4歳男児の母）。「去年から参加していたがリーダーになってはじめて、目に見えないことが色々あったんだと再認識した。運営上の細かなルール（会費、おやつ管理、片づけなど）は、皆で相談しながら決めた。世話役の負担が重くなりすぎないこと、あまり細かく決めすぎないことが長続きの秘訣だと思う」。
- ・ 柔軟なルール改正：会費をとっていた年度もあったが、少額の金の管理のために役員は毎回出席することになり負担が大きかった。今年度は会費はとらないことにし、おやつは現物を持ち寄りロッカーに蓄えて計画的に出すことにした。ルール：お菓子は1月に各自1袋持ち寄る。ティッシュも同様。おやつ準備やかたづけは皆で行う。朝参加したら、はじめに名簿に親子の名前を書く。初入会者には名簿に住所を記入するように伝える。
- ・ 教諭からの刺激を受けた新しい挑戦：絵本を読むことの大切さは分かっていたが、どう読んで良いか、何を選んで良いかわからず、子どもあまりのらないので読んでなかった。4歳男児の母。絵本の読み聞かせのボランティアをすることで読み聞かせをすることに抵抗がなくなった。
- ・ 未就園児の母親たちと在園児との交流：上に在園児を持つ母親も5人いるため交流は多い。Y園は障害児を受け入れているため、教諭が休ん

でいる時や多忙な時など、ボランティアで障害児につきそう母親もいる。母親たちは、他の子どもの名前をよく覚えていて、声をかけたり、母親にかわって面倒をみたりということもよくみられた。母親同士はお互いに相談相手になったり、はげましたりという場面もみられた。幼児期は母親同士の関係作りには良い時期ではないか。通信簿がないことから無用な競争がない。専業主婦の割合も小学生よりも多く、時間的な余裕があるように見受けられる。複数の母親が「学校にあがったら寂しい、どうしよう」と冗談めかして話していた。

- ・ 教諭と母親の交流：職員室と絵本の部屋は5メートル程離れており、教諭は通りかかることはあっても長時間いることはできない。母親たちは用事があるときは職員室に主任に尋ねることが多かった。その他の教諭に立ち話で子どもの心配事などを降園時に質問することもみられた。

3 教諭へのインタビューから

通常の保育だけでも多忙であるので未就園児クラスの運営はリーダーさんにまかせてある。子どもの安全管理は親が行うので教諭にとって気が楽であるが、園庭や校舎の管理は園側の責任なので門扉などを開始前に修繕した。

良い点は、未就園児の親のボランティアが活発なので助かるという感想があった。例えば「父親による営繕やペンキ塗りや芝刈り機を使った草刈り、母親たちの草刈りなど、リーダーさんが自発的にやってくださるので助かる」などであった。

幼稚園児と未就園児の親子と交流について、夏休み前には「交流させたいが時間帯が異なるので難しい。園庭で遊ぶのは10時くらいまで、後は室内での活動に移る。未就園児の参加は11時頃から多くなるので、同じ活動は組みにくい」という感想があった。2学期の運動会練習の時期（9月頃）には、「絵本の部屋が使えないため園庭で在園児も一緒に遊んでいる。（在園児と未就園児が）まざって誰が誰か分からない」というほど、さかんな交流がみられた。

問題点として絵本の部屋を未就園児の活動場所としているが、幼稚園児が保育の流れで利用しにくい所もあり、環境整備に課題があるという感想

があった。

<総合的考察>

藤崎(2001)は、幼稚園における子育て支援の課題として、4つの課題；①教諭の専門性、②物理的環境整備、③行政との協力体制、④子育て支援の効果(+-の両面)の検討をあげている。Y園での支援活動について、4つの課題の各々から検討してみよう。

① 教諭の専門性

幼稚園における園庭開放型の子育て支援の場合、教諭はあまり前面に出ない方がよい。母親同士の仲間作りが大切である。専門家はよべば答えられる範囲に常駐していることが肝心で、専門家が計画をたて親はお客という形式は望ましくないことが指摘されている(原田、2001；柏木・森下1997)。Y園の場合、人的配置はないため主として主任が関わり、他の教諭も母親からの質問等には保育時間終了後は答えていた。専任の教諭が不在のために、当然のことながら在園児の教育課程が優先されるため、新学期の多忙な時期は企画する事自体が遅くなる。後回しになる。専任でなくても加配などで人員を配置すれば準備や計画がしやすくなる。

② 物理的環境整備

図1で分かるように、園庭と未就園児のための部屋が近接していることは恵まれた環境である。狭い空間に閉じこもることなく息抜きができる。子どもも屋内・屋外の遊びを自由に選んで遊べる。屋内の環境も時々模様替えされて、1歳代の子どもが参加するようになったら、そのための小コーナーが作られるなど、環境設定は柔軟に変えられていた。在園児の絵本を読む活動は制限されていることは否めない。財政逼迫の折から校舎新築は困難であるが空き教室の活用などを考えていきたい。今後参加人数が増えると荷物の管理なども困難になることが予想される。コインロッカーの設置などは必要かもしれない(「0123吉祥寺」では荷物を取るときには100円が戻るような設備が設置されている)。

③ 行政との協力体制

Y園は公園や警察署・県立図書館などに近いと

いう立地条件環境に恵まれているために他の機関と連携した行事への参加は多い。これはY園にとって利点でもあり、負担でもある。未就園児の保護者たちは概ね子どもにとって良い機会と捉えていた。県立図書館や警察署などで開催されるイベントには母親は積極的に参加していた。ある母親は、張り出された月の園だよりを見ながら「参加できる機会を逃がしたくない、色々な経験をさせたい」といった。無料であることも魅力であるが、実費を支払ってでも参加したいという意見が数人からあがっていた。専業主婦が多く、保育園児に比較して経験が少ないのではないかという不安があるようだ。

経常的な相談機関や他の育児サークルとの横のつながりなど今後開拓していく必要があり、今後の課題である。特筆すべきこととして、Y園では絵本指導の読み聞かせ(木曜日は保護者、火曜日は4年生)や貸し出し、歩いて県立図書館利用など積極的に取り組んでいる。未就園児においても同様に絵本や図書館への参加が取り組まれた。

これは就園児と未就園児、母親をむすびつける良い機会でもあった。読み聞かせをする母親は、各クラスに上の子どもを持つものに固定していた。絵本の貸し出しにはその他の母親があたるので、未就園児の母親と在園児が交流することができる良いの機会となっていた。

読み聞かせの効果性について秋田・無藤(1996)は家庭の読書環境が児童の読書行動に及ぼす影響を明らかにし、幼児期の読み聞かせの効果性を確かめられた。ある母親は「読み聞かせの大切さは認識しているが、下の子が生まれた後中断していたが園での取り組みで、読み聞かせの大切さを再認識し再開した」という感想をよせた。他のメディア(TV、VTR、ゲームなど)の発達している現在、読み聞かせの大切さは相対的に弱まっているようだ。園での取り組みの波及効果は大きいと思われる。

④ 子育て支援の効果

・プラス面：子どもと保護者にとっては、支援センターの存在は、オアシスのようで、公園がわりでもある。沖縄県の公立幼稚園では1年保育が多い。私立幼稚園や保育園に入所できず、家庭のみで過ごす4歳児の集団保育を保障する場

となっている。

親にとってはストレス発散の場であり、母親同士の交流も盛んで育児情報やフリーマーケット等の生活情報の交換の場ともなっている。保護者の中で運営上の規則の改定なども適宜行っており、運営能力の向上もみられた。

幼稚園側にとっては、就学前に親子と園との関係がすでに形成されることになるので、入学後の適応がスムーズになった。また、例年は幼稚園の役員になり手が少なくて困っていたが、活動に参加した保護者の中からリーダーが育ち、幼稚園での役員を引き受けてもらえるようになった。

- ・ **マイナス面**：自由参加の施設であることから母親側からはなく、幼稚園側のみから出された。未就園児の登園時間が遅いので通常の幼稚園児の保育との調整が難しい。また、絵本の部屋の環境整備が不十分なため幼稚園児への絵本の貸し出しなどの活動が行いにくいことがある。母親の側から「午後も開けてほしい」という要望もあったが、人員配置がない現状では、教育時間外の活動はおのずと制限があるであろう。

結論：沖縄県においても母親の子育て支援へのニーズは多様である。母親が選べるように様々な形の支援策や場所があるとよい。沖縄県でも育児サークルが各地に増えてきたが、構成人数が比較的少ないため、当番性などの制約が多く負担におもう母親もいた。その点、Y園の未就園児受け入れは「ゆるやかな集団で制約が少なく自由であることが良い」という意見が多かったことは特筆すべきであろう。原田（2001）は子育て支援事業においては「親を運転席に支援職は助手席に」と主張する。教諭が前面にすぎないY園の試みはその点でも評価できる。

Y園に参加する場合でもある程度の社会性は

必要であるから、引っ込み思案な母親や不安の強い母親などは入りづらいと思うだろう。本研究の方法論的弱点は、参加した母親のみを対象としていて、こなくなった（これなくなった）母親は対象としていないことだ。そのため、ここへの不満は表面には出てこない。ここに適応できない母親もいることを念頭におかねばならない。そういう母親層には、施設を開放して待つような支援でなく、支援者の側から接近するために出かけていく方法（アウトリーチ）が必要になってくるだろう（小出；1999）。

引用文献

- ポピンズコーポレーション 2001 文部科学省委嘱事業「子育て支援方策に関する調査研究」報告書
- 秋田喜代美・無藤隆 1996 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討 教育心理学研究, 44,109-120.
- 柏木恵子・森下久美子編著 1997 子育て広場武蔵野市立0123吉祥寺一地域子育て支援への挑戦 ミネルヴァ書房
- 原田正文 2001 子育て支援とNPO 朱鷺書房
文部省 1999 幼稚園教育指導要領
- 中野由美子・土谷みち子編 1999 21世紀の親子支援 ブレーン社
- 小出まみ 1999 地域から生まれる支えあいの子育て ひとなる書房
- 藤崎真知代 2001 幼稚園における子育て支援の特徴と課題 日本乳幼児教育会11回大会プログラム, p107.
- 那覇市教育委員会 平成13年度文部科学省地域指定一那覇市一幼稚園における子育て支援活動の推進に関する調査研究委託事業事業報告書